

【基盤研究(S)】

総合・新領域系（複合新領域）



研究課題名 牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究

名古屋大学・大学院文学研究科・教授 **しまだ よしひと**
嶋田 義仁

研究分野：複合新領域

キーワード：地域間比較研究

【研究の背景・目的】

人類史における初期中期の文明形成は、アフリカ大陸からユーラシア大陸へと広がる内陸乾燥地を舞台に繰り広げられてきた。この「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地域」は近代以前の世界においては、物流と人の移動の中心地であり、多くの文明や帝国が築かれてきた。

乾燥地に都市や巨大国家が形成された理由として、これまで灌漑による文明形成が指摘されてきたが、本研究においては、牧畜文化の重要性に注目する。家畜は、食糧資源であるだけでなく、交換財、蓄財でもある。また、家畜の皮や毛は高価な工芸産物へと加工されうる。さらに、大型家畜は、戦闘手段、物質と人の移動・運搬手段としてすぐれ、近代以前の商業文化や都市・国家形成において必要不可欠なものであった。この地域に当時発達した国際的な交易網は、家畜の存在なくして成立しえない。

大航海時代に始まる近代は、ヨーロッパを中心に海洋ルートを開拓することによって世界が再編されていった時代であった。一方、内陸乾燥地においては、海洋ルートからはずれたことで交易網が衰微し、破壊され、現在、この地域は世界の貧困地帯となってしまった。これは、ヨーロッパ文明と、アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明が相互を理解せず、世界再編が貫徹されていないことが一因である。

本研究は、アフロ・ユーラシア内陸乾燥地を一連の牧畜文化複合体ととらえ、この地域の人間一家畜の関係を多角的にかつ詳細に分析することにより、旧大陸における人類史を統一的に理解することを目指す。

【研究の方法】

アフロ・ユーラシア内陸乾燥地を、Ⅰ. 冷帯草原型、Ⅱ. 熱帯砂漠型、Ⅲ. 熱帯サヴァンナ型、Ⅳ. 山地オアシス型の4類型に分けて研究をすすめる。それぞれに対応する主要民族と家畜は、Ⅰ. モンゴル、ウマ、Ⅱ. アラブ、ラクダ、Ⅲ. フルベ、ウシ、Ⅳ. ペルシャ、羊・ヤギである。

それぞれの地域において、①気象・地理・生態などの自然科学的特性、②民族による自然認識や家畜飼養の技術などの文化的特性の2方面から資料収集、分析を行う。

4類型に対応する文明は、いずれも牧畜文化を中心に発達してきたが、それぞれの文化圏において、牧畜がどのような文化体系を形成してきたかを、①家畜利用、家畜管理の技術、②家畜の宗教、象徴的体系の2側面から調査する。

さらに、それぞれの文明において、牧畜文化と、牧畜以外の生業、文化要素とがどのような関係にあるかを分析する。具体的には、灌漑農業、漁業、家畜を使った交易、工芸・商業との関係を分析する。4類型の文明には、それぞれ独自の政治形態、宗教が対応するので、政治・経済・宗教レベルにまで考察が及ぶことを射程にいられて、生業分析を行う。

【期待される成果と意義】

- ①アフリカ、中近東、中央アジアと分断して研究されてきた地域を統一的に理解し、アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の内的構造を解明する。そのことによって、新たな歴史の枠組みを提示することができる。
- ②牧畜文化に注目することにより、人類の歴史を通じた家畜の重要性、人間一家畜関係の多様性を再評価できる。
- ③この地域の文化、経済、社会の現代的変容を明らかにすることにより、アフロ・ユーラシア内陸乾燥地が共通して抱える現代的問題である、馬・ラクダ飼養の衰退、土地の私有化、砂漠化、民族間の抗争、資源をめぐる紛争などの諸問題の理論的解明に寄与することができる。

【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

- ・嶋田義仁 2005 「乾燥地域における人間生活の基本構造」『地球環境』10-1, pp3-16
- ・嶋田義仁 1995 『牧畜イスラーム国家の人類学』世界思想社
- ・嶋田義仁 1993 『異次元交換の政治人類学』勁草書房

【研究期間と研究経費】

平成21年度－25年度
153,900千円
ホームページ等
<http://islanken/>